

航 空

フライピン飛行第二〇〇戦隊（少 飛十五期）

香川県 井上 幸男

井上さんは、陸軍の少年飛行兵学校出身というこ
とですが、卒業後の戦場は何処でしたか。

私は昭和三年二月二十八日に、現在の香川県大川郡
志度町鴨部で生まれました。昭和十八年頃になると戦局
は急を告げ、学徒動員令は出る。我々も、国のために
という気持ちが強くなり、旧制の中学校を卒業し、徴兵検
査を受けたり、陸士、海兵などへ入学するよりも、少
年飛行兵への道を選ぼうとしたのです。

陸軍少年飛行兵学校の本校は、東京の村山にあった
が、私は滋賀県大津の学校へ入校することが出来た。
入ったら直ぐスバルタ教育を受け、次に検査があり、
適性によって、通信、操縦、整備（戦闘、爆撃）に分
けられた。

私より若年の者は大津に残ったが、私は昭和十八年
十月に、岐阜県各務原の岐阜陸軍航空整備学校へ入校
した。熊谷は操縦、所沢は整備（爆撃）です。私は整
備でも戦闘機だった。

教育は、陸軍軍人の卵としての基礎教育で、陸軍生
徒の身分で半年。ですから、この期間は準軍人で軍歴
に入らない。昭和十九年四月、上等兵となり、そこで
初めて陸軍飛行兵となる。生徒の場合は学業を止めて
家へ帰れるが、兵（軍人）になれば営倉に入れられ罰

を受ける。

六月から九月までは、陸軍航空発祥の地である明野（三重県）で実戦部隊の実地訓練に参加する。機種は、当時の最新鋭機のキー八四（疾風）で、その機付になった。九月の末に卒業、岐阜へ帰り、さらにまた明野の戦闘機部隊へ配属されたのです。

―話が中途になるが、陸軍戦闘機隊の総本山といわれた明野陸軍飛行学校のことを話してください。

明野陸軍飛行学校史によると、大正九年四月に開校された。その時は、将校一二名、雇員、看護卒、職工等二五名、総数三七名だったとあり、五月一日から将校学生などが入校したが、五月十五日には、学生生徒の滝川中尉が墜落殉職している。

昭和六年十月には、日本初飛行に成功した徳川好敏少将（男爵）が明野陸軍飛行学校長に補せられた。その時はもう満州事変が勃発していて、学校もますます充実していったようである。昭和十四年には、陸軍氣象部明野観測所設立、支那事変勃発によって、さらに入校生もだんだん多くなっている。

昭和十六年になると、戦闘機六四機による連合特殊演習が、杉山元參謀総長以下見学のもとに実施され、大東亜戦開戦と同時に防空準備が下令。昭和十七年以降は学生も多く、訓練も激しさを増した模様で、墜落殉職者も多く記録されている。

年表の昭和十九年十月十二日欄には、

「一九一九年軍令陸甲第一三六号及陸亜機密第五九四号に基き、第三〇戦闘飛行集団司令部及飛行第二〇〇戦隊の臨時編成を当教導飛行師団に下令になり翌十月三日完結す。

明野教導飛行師団長陸軍少将青木武三

補第三〇戦闘飛行集団長

陸軍航空基地審査部部長陸軍大佐今川一策

補明野教導飛行師団長代理を命ず

十月十三日 第三〇戦闘飛行集団及飛行第二〇〇戦隊の出陣式を十一時挙行し、教導航空軍司令官陸軍中将菅原道太閣下の訓示を受く」
と記されている。

私の時、岐阜陸軍航空整備学校の卒業生は第一中隊

から第六中隊までで、約一、八〇〇名。私たちは本家の明野に訓練に行つて、キ―八四戦闘機（疾風）の専属整備をしていた。

明野飛行学校の年表に書いてあるように、我々の第二〇〇戦隊は十月十二日に、明野飛行師団で編成された。私は第一中隊で、フィリピンへの出陣式の写真も持っているが、十七歳の秋だった。出陣式は十三日とあるが、十五日ではなかったらうか。第二〇〇戦隊長は高橋武中佐であつたが、後にフィリピンで戦死されている。

―いよいよ飛行第二〇〇戦隊の出陣となり、井上さんも激戦のフィリピンへということになるのですが、戦隊概史を少し読んでみて下さい。

〔飛行第二〇〇戦隊概史〕

『昭和十九年十月十二日明野教導飛行師団で編成され、飛行機、操縦者は通常の二個戦隊分（八〇機）を配当し、六個中隊編成という特異な戦闘隊であつた。

戦隊長には元二四戦隊長の高橋武中佐が、副戦隊長には、二五戦隊長として中国戦線で、名声をはせた坂川敏雄少佐が任命された。明野の精鋭をすぐつた決戦部隊と期待され、飛行機（四式戦）も最優先で供給されたが、中隊長六名のうち三名は他機種からの転科者であつた。若干の幹部を除いて実戦経験者は少なく、少飛一三期生、明野（乙）課程を終つたばかりの航空士官学校五七期生の未熟者も相当ふくまれていた。しかも、編成直後に米軍のフィリピン進攻が開始され、四式戦の未修教育を終るのがやつとで、戦隊としての、訓練はほとんど行われていないまま比島進出を下令された。

そこで、戦隊の半分（第一―四中隊）を先行させることとなり、十月二一日高橋戦隊長は約五〇機を率いて明野を出発したが、テスト飛行を省略したため、離陸直後に戻る機もあり、航空総攻撃の前日に当たる二三日ルソン島のポーラック基地に到着したのは、一二機にすぎなかつた。翌二四日三五機が追及してきたので、二五日午后、戦隊主力はネグロス島サラビア基地に前進し、第三〇戦闘飛行集団長の

指揮下に入った。なお後発隊（第五、六中隊）は坂川少佐が率いて、一〇月三〇日に二一機でクラーク飛行場に到着、主力に追及してサラビアへ前進した。

概史に書かれたように、十月二十一日、戦闘隊長は五〇機を率いてルソン島へ向かって出陣した。戦闘機は一人乗りなので、整備などは爆撃機に乗って付いていく。戦闘機隊は十月二十三日、比島のレイテ総攻撃の前日に行った。ルソンのポーラック基地に着いたのは概史にあるように一二機だけだった。

戦闘機地上整備である私等は、二十三日明野を出発した。宮崎の新田原を出て台湾―ルソンのポーラック基地に着いた。内地からは先ずこの後方基地に着いたから後に、前進基地へ行くのだが、私たちは二十六日着だったと記憶している。

戦隊主力は、ネグロス島のサラビア基地に前進、私は二十七日に着いたと記憶している。私たち地上整備隊は九七式重爆撃機で行くので遅れる。戦闘機隊は先に行く。前進基地には他の第五十六、七十一戦隊がい

て、隼などの整備員もいた。

第四航空軍の富永司令官は、第二〇〇戦隊には大きな期待をかけ、サラビア基地で「皇戦隊」と命名した。戦隊は二十七日、レイテ作戦に出陣した。

〔概史〕を読む。

『富永第四航空軍司令官は、二〇〇戦隊の戦力（最新式戦闘機疾風）に大きな期待をかけ、みずから「皇（すめら）戦隊」と命名したが、一〇月二十六日以降レイテ湾制空を中心とする戦隊の実績は、必ずしも期待に沿うものではなかった。四式戦の故障続発と飛行場不良による事故機が多く、一〇月末までに撃墜七に対し、宮九大尉以下老練者をふくむ一一機が、自爆未帰還となり、可動機は九機にすぎない状況であった。戦隊はネグロス島に展開した二二戦隊と合同して、レイテ制空、夕弾によるタクロバン飛行場の夜襲、バコロド地区の防空戦闘等に当たったが、兵力の減少のため点滴用法にならざるを得ず、戦果が上らない割に損害は大きかった。

十一月一日から二三日までの損害は、自爆未帰還

一九機、大破炎上三五機と記録されている。しかし一月一日第一師団（玉兵団―満州より）の船団輸送援護の際、単機よくP38型二機を鮮やかに撃墜した吉良准尉や、一月五日バコロド地区の迎撃戦でB24を撃墜後、右腕に重傷を負いながら着陸した森田軍曹（感状授与）のような例もあった。

一二月に入ってから、七日オルモック湾に進入した米艦船の攻撃、一日には第九次レイテ向け船団掩護等に出動したが、連日の空襲でサラビア基地は穴だらけになり、一四日ミンドロ島上陸に向かう米の大船団を攻撃すべく、四式戦一五機が爆装して待機したが、最初に滑走した一機が、爆弾孔にひっかけて離陸に失敗したので、出撃不可能と判断されて中止となった』

皇戦隊と命名して激励した富永司令官は後に台湾へ行ってしまった（敵前逃亡と問題になり予備役となる）。

概史にも記してあるが、戦闘機はレイテ作戦でほとんど全滅してしまい。我々地上勤務者は前進基地に残

されたまま、戦闘機の残部はルソン島の後方基地へ引きあげてしまった。空中勤務者は引きあげるが、地上勤務者は残される。これが本来の姿で哀れなものである。

ネグロス島には、マナブラ、シライ、ファブリカ、サラビア等と、秘密飛行場のタンザなど八つぐらいあったが、サラビア飛行場が空襲でやられ、タンザに移った。

昭和二十年一月のルソン島リンガエン湾の米軍上陸の時は、私たち地上勤務者はネグロス島残置のままだったが、ひどかったのはそれからで、苦勞の連続だったが、戦隊のルソン引き上げ以降の概史を読んでみる。

『一二月中旬から、戦隊主力は逐次ネグロス島の使用を断念して、ルソン島のマバラカット東飛行場に後退し、未配分の四式戦約三〇機を取得して戦力回復に入ったが、連日のように米機の来襲があつて迎撃に追われ、次々と消耗を重ねた。二〇年一月九日、米軍は大挙してリンガエン湾に上陸してきた。

戦隊は残存機をもって米艦船に特攻を加え、可動

機は皆無となったので、一三日の西哲雄中尉と梶田七之助軍曹の突入を最後に、北部ルソンのエチャゲへ後退することとなり、生き残り操縦者と地上勤務者は行軍で、エチャゲ（約三五〇キロ）へ向かったが、一三日朝、双発高練（高等練習機）に搭乗して出発した高橋隊長と津崎七二隊長は、行方不明になり、途中米軍機に撃墜されたものと判定された。

ついで、空中勤務者はツゲガラオを経て、台湾へ脱出したが、二月中旬までに後退に成功したのは、深見大尉以下十三名にすぎず、第二〇〇戦闘隊は五月三十日付で解散された。なお、地上勤務者の大部の一九四名は、カガヤン河谷にわたる山中を移行し、楠原大尉以下約一〇〇名が臨時歩兵第二五大隊に編入されて、地上戦闘に従事した。

また、ネグロス島残置隊（長・長沢中尉）の一三四人は、サラビアからシライに移り、さらに山中のゲリラ戦に移行して、終戦の日を迎えた。

戦隊の総員五二三人のうち、生還者は一三六人と記録されている。』

今読んだように、ルソンへ移った戦隊主力も戦隊長戦死というように戦力は無くなってしまい、結局解散し、臨時歩兵大隊に編入され、地上戦と飢餓との戦いで終戦を迎えたと記されている。

我々残置隊（一三四人）も苦勞の連続だった。私も戦史を作るのに資料を提出、作成に協力したので、仲間の戦死者の名前は判る。

我々の基地も艦砲射撃を受け、二五キロも退却したり、その間、地雷を背負って戦車に肉迫攻撃にもいった。シライの街へ移ってからもタンザの砂糖黍畑の中にいたりした。取り残されたサラビアの残置隊の戦闘記を長沢勲三隊長と長野武彦准尉が書いた概史「サラビア」残置隊”を拾い読みしてみる。

『昭和十九年十一月二十三日「ネグロス」の第一線に真夜中の二十三時輸送機により着陸。先発の整備員（我々）は仮眠する時間もなく作戦機の整備に故障或は受弾機の修理に不眠不休の連日であった。

翌十時頃B 24の大編隊の爆撃をうけ想像以上の大きな爆弾痕が到る処にあけられ、その激しさを見せ

つけられた。爆撃機は定期便のごとく来襲し整備作業も意の如く進展しなかった。十一月二十四日河野大尉の戦死により当初の中隊長四名戦死、二名入院、操縦者も出動の度に帰らぬ人となった。

米軍のミンドロ島上陸後、戦隊主力はルソン本島に撤退することとなり長沢中尉以下一五八名は残置隊として編成された。(制空権は無くなり、我々の救出は不能となったので、米軍の上陸防禦にそなえることになってしまう)一月「ルソン本島」でも米上陸軍と交戦状態に入り吾々残置隊も地上戦闘に全力を傾注すべく遊撃隊訓練開始。小銃、機関銃、擲弾筒の訓練を始めた。

二月二十六日「エスタキオ」に転進。この頃から米軍の空襲が激しくなった。空襲の合間を見て荒神山に資材等を搬入陣地構築、設営を実施し米軍の上陸に備えた。

三月下旬突如として「ネグロス」「バナイ」島間の海上に米艦船群来攻、海上は艦船群で掩いかくされた感があった。上空は戦闘機、爆撃機が終日昼夜

の別なく制空爆撃が始まり又艦砲射撃は間断なく砲弾の雨を降らせ、吾々は地上兵団の山地撤退を掩护すべく「シライ」地区の陣地展開を命ぜられた。……」

前に申したことと重複するが、三月二十日、シライの町の橋を工兵隊が爆破し、私等はその前に傘型地雷(二五キロ)を背負い、戦車に肉迫攻撃を命ぜられた。部隊は海岸線の「トーチカ」とその後方に設置した陣地に拠って、米軍の攻撃に耐えていて、少飛同期の景山が艦砲射撃で戦死一号となり、十数名の戦死者も出した。我々は肉迫攻撃班二〇名を編成し、全員死を決して任務についた。

しかし、艦砲射撃はますます活発になり、二十七日「ダイナマイト」や火焰瓶が各人に配布された。二十八日最前線の「シライ」には食料も無いので、日本名で名付けた銀波構(名は東海道藤栗毛に出てくる地名などをつけていた)へ、食糧受領に三名が、二十時頃出発した。また、物資集積所となっている羽黒台の今井部隊へ手榴弾一五〇発受領に向かった。途中大雨のため、第四独立整備隊に一泊し、二十九日下山、「シ

ライの町を確保せよ」との命令のため、食料・手榴弾を持てるだけ背負って「シライ」へ出発した。

途中米機に見えられ連続攻撃を受けて四名戦死、二名負傷を出し、夜になってようやく陣地に帰って来た。

米軍は早朝から猛爆撃と艦砲射撃に掩護されシライ南方三〇キロ地点に上陸し、正午頃にはシライの街外れまで進出して来たが、前に言ったように工兵隊に橋を爆破（三月二十日～二十一日）させてあったので、我が軍は高射砲を水平にして、進出してきた戦車に一斉射撃をして撃退した。

敵は四月二日夕刻「タリサイ」「シライ」飛行場に入入して来て、迫撃砲と戦車砲の集中砲撃をうけたが全員必死に陣地を死守した。陣地撤収の命令がきたのは夜中だったので、翌未明、軍事施設、橋梁などを爆破して、大火災の中を麓まで一五キロ、河の中を腹まで水につかりながら引き上げた。その途中夜が明けたので敵の哨戒機に見付かり、遮蔽物がなく一三ミリの機銃掃射を浴びて、頭を射たれて塩田・森兵長等十数名の戦死者を出した。

それからジャングルの中に入って、夜を徹して陣地を構築したが、それから終戦まで筆舌に尽くせない死闘の連続となった。四月四日に石腸台、荒神山に転進して陣地構築をし、二十六日、天長節を期して斬り込み作戦打合せのため大隊本部に集合したところを、敵に無線傍受され迫撃砲の集中射撃をうけ、竹内少佐外数名が戦死した。隊では丸山、江口伍長が死んだ。長沢隊はもう七〇人ぐらいになっていた。

四月二十九日（天長節）長沢隊は主力をもって敵陣三軒家付近に斬り込む。五月二日から昼夜の別なく敵の猛攻撃を受け、五月十日の海軍記念日には川村曹長以下が切り込んだり、三峯方面から攻撃を開始し銀杏台に転進した。

六月二十四日「ネグロス島」の東北端に生存者五〇名程で移動し、シランバランに到着した。その間、設営班、救護班は本隊と別れてそれぞれの任務についていたが、消息は全く不明となったり、陣地構築中物凄い迫撃砲の洗礼を受け、同期の坂田が戦死したが、他の人の名前が思い出せない。それ程の激戦であった。

シラン balan まで、途中動物も通れないような急峻千仞の谷、急流を、靱・被服・武器を背負い、隊長を中心に全く死を超越した強行軍で二週間頑張り通した。この二週間で多数の戦死者を出したが、何故か戦火の激しさの記憶が薄くなってしまった。各部隊はほとんど組織的な行動がとれない状況だったが、残置隊は最後まで団結して行動した。

再び転進して七月二日「マナブラ」付近で自活態勢に入ってゲリラ戦をやっていた。七月十三日頃、鈴木軍曹以下七名の第一分哨は全滅した。私は第二分哨で三名で守っていたが、ゲリラから二、三発射ち込まれて私は倒れたが、河の中を渡って、本隊に通報した。

八月十七日宣伝ビラによって日本軍降伏と察知したが、信頼は出来なかった。その後八月二十八日軍使が来て、軍の降伏命令を受けた。我が隊は弓削部隊と名付けた。矢は放れて再び帰らずということで命名して、地上整備部隊だったが、他兵科と同様に切り込みもやった。

ネグロスのマンダラガン山は白骨街道といわれている

だが、部隊から離れて野戦病院へ行った人もいる。その人の話では、戦病死者の死体が累々としていて正に白骨街道であったが、その麓には温泉があり、寒期は雪が降っていて、フィリピン人でも入ったことがない山岳地帯であるといわれていた。

フィリピンへの米軍上陸以来、戦争の末期には各部隊のほとんどがバラバラに行動していたというが第二〇〇戦隊残置隊長沢隊は、前にも言ったように最後まで団結していて、九月末にフェアリカで投降した。

それから一ヵ月ぐらいして、レイテ島のタグロバンへ送られた。昭和二十一年十二月帰還まで俘虜生活をして、十二月十五日名古屋へ入港、復員し、十八日に帰宅することが出来た。

人間の若い時の苦勞はことごとくした。帰還後マリアは一回発病したが、後で回復した。昭和十九年十一月末、サラビア飛行場の空襲の爆風で吹き飛ばされ肺をやられ、傷病者となった。名古屋では復員の時、傷病証明書や、いろいろの証明書をもらった。爆風で口から鼻から血を吹いて、肺が損傷しているため微熱

が出たのでフィリピンの米軍病院でレントゲンを撮ってもらい、その写真を持って帰り、普通寺の病院に送ったが戦傷者として扱って貰えなかった。

残置隊、長沢隊長は東京に、長野准尉は鹿児島におられるが、「戦闘記」の最後に「将校、下士官、兵、少年航空兵、そして家族が内地で待っている軍属の人達が、無念の涙を流しながら南海の島で散ったことを、今もって忘れることが出来ない。これらの多くの人達の冥福を生存者一同で祈念する次第です」と結んでいる。

―今まで概史を縦糸にして、第二〇〇戦隊の整備隊のことを伺ってきたのですが、井上さんが現在でも強く心に残っていることを、断片的でも結構ですからお話下さい。

本来なら、系統だつて日時を追つて話をすればいいのだが、その中のいくつかを話してみます。

昭和十九年の十一月頃から、操縦者宿舎では戦死者が日毎に数を増してきた。その名前を見るたびに手を合わせ無念の涙が落ちた。特に森田軍曹の面影が眼に

浮かぶ、背が高い男前の人だった。

十二月になると連日空爆があり、落下傘爆弾の投下も多くなった。砂糖黍畑にひっかかかって白い花が咲いているようだが、時限装置があつて間断なく爆発する。その頃はもう給与が悪く、その砂糖黍を噛んで空腹をしのいでいた。昼は飛行機の整備、修理を空襲の合間にやる。夜は着剣して歩哨となつて飛行場の警備をしていた。

昭和十九年十二月七日の思い出を記録してあるが、タンザ基地では眼も開けておられぬほどの爆撃であつた。余りのひどさに土民部落へ逃避した。さらに記憶によれば、タンザ基地最後の出撃は二機だった、そのため前夜より不眠不休で整備をした。特攻機は少飛十三期小池伍長だった。隊史によれば、

「一三・二〇B 24型機十一機の攻撃を受け、滑走路に一〇〇発の被弾ありしも人員器材異状なし。」

昭和二十年になつて山中に陣地を築いてからだが、五月末か六月初め頃だったか。食糧難となりマルゴ川を渡つて自活食糧を求めて出発する時、長沢中隊長が

訓示をした。「ゲリラの攻撃を警戒せよ……など」であったが、私はこの時銃を左肩にかけていて「ハイ」の返事で力が入り、銃の引金に指がかかっている弾が飛び出した。耳鳴りがしばらく続いたのだが、中隊長は何も言わなかった。当時の兵力は三〇名ぐらいで、若し敵に発見されたらと思うと大失敗であった。

病死された先輩のことだが、七月頃マラリアで衰弱していた萩原久雄伍長の顔に水をつけながら鬚を剃ってあげた。しかし、これが最後となって翌朝死亡された。兄とも慕う人だった。

竹政岩雄曹長は七月中旬、ネグロスでマラリアのため病死されたが、最後まで世話をし死水をとってあげた。同じ第一小隊で、大沢小隊長、萩原伍長と私は同一行動をとっていたので、今でも哀しい思い出である。

内地の司令部偵察機隊毎日が命がけ

富山県 長谷川 光 勇

「長谷川さんは我々仲間では若い部類に入るのですが、何年生まれで、勤務は何処でしたか。」

大正十三年八月十二日生まれですから徴兵なら初年兵というところだが、私は滑空機（グライダー）の通信省の免許を持っていた。昭和十七年頃はグライダーの草分けで、グライダー熱が盛んになった。兵隊へは志願でいったのですが、その前に旧制中学校でグライダーの教官みたいなこともやっていた。若かったがグライダー免許を持っている者は少なかったですから。

グライダー免許というのは、今も言ったように通信省（今は郵政省）の管轄で、民間人の航空養成所が、各地方、ブロック別に六カ所ぐらいあったと思う。私は富山県だから新潟の養成所へ行行った。そういう人た